

● 関 西

よこ はら せん し
横 原 千 史

関西の2019年の音楽シーンを概観するにあたって、関西独自の取り組みをしながら、情報発信をしている活動を中心に振り返ってみよう。まずは「びわ湖リング」と呼ばれるワーグナー《ニーベルングの指環》連続公演。3年目に入り《ジークフリート》が上演された。新国立劇場以外で《指環》のチクルス上演は、日本では不可能と思われたが、それをびわ湖ホールがやっていた。しかも劇場の独自企画で、沼尻竜典音楽監督のプロデュースと演奏実践の力と、長年オペラを続けてきたびわ湖ホールの運営と裏方の力が、うまく融合してこそその成果といえる。ミヒャエル・ハンペの演出は、地味とはいえ、ワーグナーのト書きを現代風に実現しようとする意図で、過剰な「読み替え」演出よりも、安心して音楽を味わえる。この劇場には付属のオーケストラはないが、こここのところ実力を高めた京都市交響楽団が優れた演奏の基礎を担っている。来年のチクルス完結の《神々の黄昏》も大いに楽しみだ。また、びわ湖ホール声楽アンサンブルは、新国立劇場や北海道などに活動領域を広げている。

オペラでは、兵庫芸術文化センターが圧倒的集客力で群を抜き、今年はミュージカル仕立ての《オン・ザ・タウン》で、ソリストやダンサーがダイナミックに踊り、演出のマクドナルドの絢爛豪華な舞台も印象的。プロデュースの佐渡裕はバーンスタイン音楽で無類の強さを見せた。バロック・オペラの優れた上演もあり、多くのヘンデル・オペラの日本初演を手がけてきたVivava Opera Companyが《エツィオ》(大森地塩指揮)を魅力的な演奏で初演した。関西歌劇団《オリンピアアデ》(本山秀毅指揮)はアリーナ形式の舞台で、いづみホール《ピグマリオン》(寺神戸亮指揮)は舞踊付きのオペラバレでそれぞれ興味深い公演となった。「大阪国際フェスティバル」の演奏会形式の《サロメ》は、シャルル・デュトワのタクトによって充実した出来栄となった。この他、関西二期会《フィガロの結婚》、堺オペラ《黒蜥蜴》、びわ湖ホール《トゥーランドット》、みつなかオペラ《秘密の結婚》、カレッジオペラハウス《カブレティとモンテッキ》、いづみホール《ボッペアの戴冠》、伊丹市民オペラ《道化師》、フェニーチェ堺《まほうの笛》など優れた舞台が多かった。

オーケストラでは、大阪の4団体、大阪交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団が、共同して年間計画を記者発表し、共同の企画をする取り組みが定着しつつある。恒例となった大阪国際フェスティバルの「4大オケの響演」では今年も合同オケの形で、佐渡裕指揮で《惑星》と《アルプス交響曲》が演奏された。共同プロジェクト「とことんリヒャルト・シュトラウス」で、各楽団がシュトラウス作品をプログラムに組み込んだ。大阪フィルハーモニー交響楽団は、音楽監督尾高忠明が定期演奏会で、マーラーの交響曲第9番やエルガーの交響曲第1番などを取り上げ、後者はライヴ演奏のCDが発売され、充実した演奏ぶりを聴くことができる。ブラームス・チクルスで、尾高は交響曲と珍しい合唱曲を組み合わせて注目された。

大阪交響楽団は、ミュージック・アドバイザー外山雄三が自身の新作交響曲を世界初演して話題となった。ガブリエル・フェルツラ客演指揮者の力演も目立った。関西フィルハーモニー管弦楽団は、桂冠指揮者飯守泰次郎が毎年のブルックナー・シリーズの総まとめとして、交響曲第9番で、悠然としたテンポで、巨匠の円熟した境地を聴かせた。常任指揮者藤岡幸夫は、菅野祐悟などの新作を初演して、多くの聴衆を集めた。日本センチュリー交響楽団は、首席指揮者飯森範親が、やはりブルックナーの交響曲第9番を散り上げ、透明な音色でシャープな音楽観を披露した。いづみホールの全曲演奏を目指す「ハイドン・マラソン」も好調で、交響曲の曲数は50曲に近づいてきた。ライヴ録音のCDも優れた成果である。京都市交響楽団は、常任指揮者広上淳一、常任首席客演指揮者高関健、下野竜也の3人が、定期演奏会で広上のマーラー交響曲第7番や高関の《わが祖国》など、それぞれ得意のレパートリーを手がけることで良い方向に進み、楽団の演奏水準を高めている。兵庫芸術文化センター管弦楽団の定期演奏会では、井上道義の客演指揮とパチョ・フロレスのトランペット独奏によるトランペット協奏曲が印象的であり、とりわけ井上のコーブランドの演奏で躍動感が際立っていた。神戸市内管弦楽団は2020年のベートーヴェン生誕250年を記念するチクルスに先駆けて、神戸市混声合唱団とともに、《ミサ・ソレムニス》を取り上げ、特に「グロリア」と「クレード」の終結フーガで精緻な演奏を繰り広げた。テレマン室内オーケストラは、サリエリの作品を取り上げるなど、独自のユニークな活動が光る。いづみシンフォニエッタが定期演奏会で演奏したリゲティのヴァイオリン協奏曲は、尾真真由子の独奏とともに、緊張度の高いこの曲の模範的な再現といえるだろう。関西弦楽四重奏団がベートーヴェンのチクルスを開き、特に後期四重奏曲で込み入ったテクスチュアをうまく処理して、深遠な響きをしみじみと聴かせた。

個人の演奏で注目されたのは、郷古廉と加藤洋之の2つのヴァイオリン・リサイタルで、ベートーヴェン・チクルスとヤナーチェクやバルトークなど20世紀作品のプログラム。後者の切れ味よく鋭角的で攻撃的な演奏は、文化庁芸術祭の大賞を受賞した。また後者の会場ザ・フェニックスホールは、毎年エヴォリューション・シリーズを開催し、若手演奏家の優れた企画を後援している。このシリーズでフランスの現代音楽作品をプログラミングしたアンサンブル九条山と、ブーランク《人間の声》を歌ったソプラノ古瀬まきをが、その上質な演奏に対し、それぞれ音楽クリティッククラブ賞奨励賞が贈られた。また現代音楽では、窪田健志打楽器リサイタル(文化庁芸術祭優秀賞)と中川日出鷹ファゴット・リサイタル(10曲全て新作初演)が強く印象に残っている。ベートーヴェンのピアノ・ソナタのチクルスを開いた河村尚子と有馬みどりの演奏も味わい深い演奏で感銘を受けた。

ホールでは、堺市の「フェニーチェ堺」と東大阪市文化創造館がオープンし、武満徹シリーズなど新たな取り組みが展開されている。

音楽活動の東京一極集中の傾向に対して、関西は地盤沈下を指摘されることもあるが、上述のように、優れた演奏は決して少なくない。それらは、文化活動を底上げすると同時に、関西からの文化発信を強固なものとしている。令和の新時代となる2020年には、それぞれの演奏家や団体が、関西独自の取り組みをしながら、それぞれの演奏をさらに洗練させ、関西の音楽文化全体の向上の力となることを期待したい。